

幼児の運動遊びの規定要因

松浦 三代子
(東京女子体育大学)

運動遊び

I 研究の動機と目的

1960年代以降、つまりわが国が高度経済成長期を迎えるや、一方中学2、3年生を対象に全国一斉学力テストが実施されだした。その頃から地域の中で遊ぶ子どもたちが姿を消し始め、近年はその影響が幼児にまで及んで来ているのである。

子どもをとりまく話題は年々多くなり、なかでも体格はよくなったが、体力がない、正木は背筋力の低下を、近藤は調整能力、平衡感覚の低下を報告している。しかし、一方近頃の子どもは「やりなさい」といわれたことは、上手に対応できるともいわれている。要するに、自分から意欲的に取り組み、やってのけることは苦手な子どもが増えているようである。これらの原因については、先行研究の中に多くの見解が述べられている。

たとえば、⁽¹⁾常田(1981)らは、私立幼稚園の4、5歳児を対象に、遊び場所、遊び友達の数、遊び相手及び相手の年齢、遊び時間、遊びの種類等を調査し、特に遊び場所については4、5歳児ともに60%が家の中で遊んでいることを報告している。

また⁽²⁾菱谷(1985)は現代の子どもの遊びの実態がどのような傾向を持っているかを、子どもを持つ親の幼児期の遊びの実態と比較しながら考察し、その中で今日の子どもは、家の中で非常に受身的な遊びをしており、イメージを豊かに使う遊びが貧弱であり、遊び仲間も少ないと報告している。

以上のごとく、今日の子どもの遊びは、必ずしも子どもにとって主体的におもしろく遊びきっているとはいいがたい。

本研究の目的は、科学技術の進歩により生活が合理化され、生活そのものが便利になっている時代にあって、子どもの運動遊びを規定するものとして生活環境全般の変容等、社会的環境が大きく原因していることを認めながら、さらに最も大きな要因となっていると思われる母親の養育態度、スポーツに対する関心、幼児の遊び場、遊び友達、地域環境などについて調査することにより、運動遊びを規定している社会的背景を探ることにある。

II 研究方法

(1) 調査対象

兵庫県姫路市M保育園3、4、5歳児270名を対象とした。

1. 被験者の母親から幼児の養育態度
2. 被験者の保育者から

①被験者の母親の養育態度の観察

②被験者の園生活における日常生活行動、運動遊びの観察

(2) 調査手続

調査主旨を説明した上で、M保育園に依頼し、園を通して質問紙を3、4、5歳児の親(または親に準ずる人)に配布し、親が記入したものを保育園が回収した。

(3) 調査票回収

(表1) 調査票回収率

対象	項目	年 齢	調査枚数	回収枚数	回収率 (%)
母親		3歳	98	98	100
		4歳	107	107	100
		5歳	80	65	81.3
保育者		3歳	98	70	71.4
		4歳	107	107	100
		5歳	80	80	100

(4) 調査時期

自 昭和62年 6月10日
至 昭和62年 6月20日

(5) 標本の整理

保育者からみて幼児の日常生活における生活行動から、身体面、知能面、情緒面、社会性等について、年齢以上に発育発達が良好と観られたら(A)、年齢相応の発育発達に観られたら(B)、年齢より発育発達が遅れていると観られたら(C)と判定評価を依頼した。

以上の内容を基本として、各年齢のA、B、Cをグループ分けし、それぞれを考察した。

(表2) 調査対象者標本

対象	母 親				保 育 者			
	男	女	計	%	男	女	計	%
3歳	38	60	98	36.2	39	31	70	26.7
4歳	45	62	107	39.6	48	59	107	40.8
5歳	35	30	65	24.0	45	40	80	32.4
計	118	152	270		132	130	262	

(表3) 発育発達判定評価表 (A、B、C) 観察(保育者)

単位:人

年齢	性	A 群		B 群		C 群		合計
		人数	%	人数	%	人数	%	
3 歳	男	19	22.3	22	25.8	4	4.7	45
	女	25	29.4	14	16.4	1	1.2	
4 歳	男	8	7.4	36	33.6	4	3.7	48
	女	20	18.6	36	33.6	3	2.8	
5 歳	男	8	11.4	29	41.4	2	2.8	39
	女	8	11.4	22	31.4	1	1.4	
全 体	男	35	13.4	87	33.2	10	3.8	132
	女	53	20.2	72	27.5	5	1.9	
計		88	33.6	159	60.7	15	5.7	262

III 研究の結果と考察

1 保育者から見た幼児

(1) 幼児のからだの発育

からだの発育は、3、4、5歳と加齢にともないA群の人数は減少の傾向を示している(表4)が、これは発育、発達の平均化の現われと言えよう。また、 X^2 検定結果より3歳(20.114^{***})、4歳(25.482^{***})、5歳(24.180^{***})にそれぞれの年齢において(0.1%)の有意差が認められた。

(2) 生活行動の活発さ

幼児の生活行動が活発であるかを観ると、A群4歳児(82.1%)が最も高い数値を示し、他は70%台であった。しかし X^2 検定の結果3歳児(24.887^{***})、4歳(23.826^{***})、5歳(18.115^{***})と有意差が認められ、A群の発育の良好な幼児ほど、動作が活発の傾向にあることが観られた。

(3) 遊び仲間

保育園での遊び仲間は、3、4、5歳児ともに友達が多く、特にA群では3歳(95.4%)、4歳(64.3%)、5歳(87.5%)で X^2 検定の結果3歳児(16.111^{**})、4歳(28.376^{***})、5歳(11.147^{*})に有意差が認められた。3歳児、4歳児には、保育者に遊びを求める幼児も少人数ではあるが観られた。また、1人遊びを好む幼児は、5歳児B群(39.2%)、男子に観られたが、これはすべて友達と遊べないということではなく、幼児自体が自分の遊び

の世界を持っている現われと思う。

(4) 遊びの工夫

幼児の遊びの中に創意や工夫が観られるか。A群3歳(38.6%)、4歳(53.6%)、5歳(56.3%)と加齢にともない工夫して遊んでいる傾向は観られる。 X^2 検定の結果より3歳(12.932^{*})、4歳(26.071^{***})と有意差は認められた。B群は、3歳、4歳、5歳ともに遊びの中に工夫が認められることは少なく、これは発育、発達との関連の深いことを示していると思う。

(5) 理解

教えられた内容についての理解を観ると、A群、3歳(65.9%)、4歳(82.1%)、5歳(75.0%)といずれも理解が早いと観察された。 X^2 検定の結果からも3歳(19.448^{***})、4歳(35.273^{***})、5歳(18.863^{***})と有意差が認められた。B群3歳(50.0%)、4歳(25.0%)、5歳(21.6%)と数値は全体に低く現われたが、この項目が発達の上で個人差も大きいことを示しているものと思われる。5歳A群が4歳A群より低い数値を示したのは、発育発達の平均化と思う。

(6) 約束

幼児は日常生活の中で、または運動遊びの中で約束を守っているか。

A群3歳(85.9%)、4歳(89.2%)、5歳(93.8%)、B群3歳(44.4%)、4歳(77.8%)、5歳(62.7%)と一見発育発達のよいA群の方がB群よりも高い数値を示す傾向が観られたが、いずれも有為な差は認められなかった。

(7) 根気強さ

発育発達に根気強さはどのように関係しているかを観た。A群3歳(77.2%)、4歳(78.6%)、5歳(93.8%)で X^2 検定の結果、4歳(27.559^{***})、5歳(14.830^{**})に有意差が認められ、発育発達の良好な幼児ほど根気強い傾向が観られた。

(8) 性格の明るさ

幼児の表情はその日のできごと、特に登園するときに珍しいものとの出会いがあったり、新しい興味が発見されたりすると変化すると言われている。A群3歳(72.7%)、4歳(82.1%)、5歳(87.5%)、B群3歳(63.9%)、4歳(63.9%)、5歳(41.2%)と各群ともに、加齢とともに性格も明るくなる傾向が観られた。 X^2 検定の結果3歳(17.411^{**})、4歳(13.670^{**})、5歳(10.991^{*})とそれぞれの年齢において有意差が認められた。

以上、保育者からのA、B、C群の発育発達をそれぞれについて観たが、全般にわたって、A群の幼児は、からだの発育も良好で、生活行動は活発、運動遊びを好んでおり、園内では、多くの友達と仲良く遊ぶことができる。また遊びの中に創造性や工夫も認められ、物事の理解も早く、性格は明るく、根気もあるということが観られた。

B群ではA群と顕著に違った項目は、「理解について」であり、「約束について」はA、B、C群の間に X^2 検定の結果、有意差は認められなかったけれども、この項目は

発育発達とも強い関係にあり、個人差の大きさが観られた。

2 保育者からみた母親

昭和30年代半ば頃の出生者から伝承遊びができなくなつたと言われている。被験者の母親は大半がこの時代の出生である。

保育者に母親の養育態度について観察を依頼した目的は、幼児の成長の上に母親は最も影響の強い因子と考え、第三者からの観察結果と、母親自身の回答した養育態度を比較しながらA、B、C群の背景を考慮するためである。

(1) 被験者の母親は自分自身のために何か運動をしていると思いますか。

この質問には多くの保育者がどちらともいえないと回答しているが、 X^2 検定の結果A群3歳(23.276^{***})、4歳(16.170^{**})の有意差が認められ、A群の母親はB、C群の母親よりも運動に関与しているように思われる。

(2) お母さんは意識的に運動するようにしていますか。

幼児と意識的に運動をしていると思われる母親は3歳児A群のみであり、 X^2 検定の結果(18.625^{***})の1%水準で有意差が認められた。

(3) 遊びに対する意識

A群3歳(86.3%)、4歳(75.0%)、5歳(100.0%)といずれも意識の高さを示している。 X^2 検定の結果、A群4歳児(34.748^{***})0.1%水準で有意差が認められた。意識の低いと思われるC群3歳1名、4歳4名の他は意識の強さ、弱さの違いはあるが、多くの母親は幼児の遊びの内容には関心を示している傾向が観られた。

(4) 運動遊びに対する行動

幼児の運動遊びに対して母親は高い意識を持っていることは認められたが、実際にはどうであるかを観た。A群3歳(34.0%)、4歳(17.8%)、5歳(50.0%)ともに他の項目に比べて数値は低く、期待値は示されなかった。 X^2 検定の結果3歳児においてのみ(18.625^{***})の有意差が認められた。4歳児の場合、幼児と遊んでいないと思われる母親が他年齢よりも多く、C群(71.4%)、B群(36.1%)。A群の母親(21.4%)にも観られたが、5歳児にはこの傾向は皆無であった。

(5) 母親の養育態度

一般に子どもの減少と核家族が多くなり、親子の交流はあるが、周囲の人たち、いわゆる他人との間に感情を伝えたり、受け止める機会も減る一方で、子どもはますます親への依存が強くなってきている。しかし、本研究対象の母親には、全体から考察して、その傾向は弱く、特にA群の幼児の母親は受容的養育態度が多いと観察されている。

X^2 検定の結果にも4歳児(18.176^{**})、5歳(38.887^{**})に有意な差が認められた。一方過保護的養育態度が観られたのは、3歳児C群(40.0%)、B群(27.8%)、4歳児B群(34.7%)、5歳児B群(49.0%)さらにB、C群の母親には、支配的傾向や放任的傾向も観られる。

以上の結果、保育者から観た母親について考察をしてきた。その結果、母親自身、自分のための運動行動レベルとしては低く観られ、幼児の運動遊びについての関心は全体に高く、またA群の母親には強くその傾向が認められた。

母親の幼児との生活態度が日頃の生活においてどのような関わり方であるかを観ると、3、4、5歳児ともに受容的傾向が多いように観られる。放任的、支配的養育態度は5、4歳児には少なく、3歳児に若干観られた。さらにB、C群の母親には過保護が多く、放任的、支配的傾向も認められた。

幼児にとって、母親の日頃の生活態度が幼児の運動遊び、生活行動に大きな影響があるように観られる。そのようなことから、母親自身が運動好きになり、幼児といっしょに運動遊びをすることが大切と思われた。

3 母親の運動遊びに対する養育態度

すでに保育者から観た母親の養育態度を述べて来たが、母親自身、運動遊びについて、どのような意識を持っているのか、また実際に行動レベルではどのような態度を持って養育しているのか、II-(5)-(表3)に基づいて幼児の母親も幼児と同質の群に分けてそれぞれを考察する。

(1) スポーツ関係の教室に通わせているか

姫路市内には民間スポーツクラブ、行政主催の親子スポーツ教室、温水プールなど、大小いろいろあるが、そこへ通わせている母親は全般に少ない傾向が観られた。A群では3、4歳とも10%台であり、B、C群では3歳が10%台で、4、5歳は20%台である。またA群5歳には一人もないということは珍しくさえ思われる。

しかし、スポーツ教室に通わせている多くの母親は、健康を目的とし、幼児の体格、体力の向上を願っていることで、決して仲間が行っているからということでないと思われている。

(2) 母親自身の運動行動

2-(1)で考察した通り、多くの母親は自分自身の運動はしていないことが明らかとなった。しかしA群の母親はB、C群の母親よりも運動行動が観られた。 X^2 検定結果からも3、4、5歳とも1%水準で有意差が認められた。

(3) 運動遊びの遊具、用具

被験者の全家庭に、ボール、縄とびをはじめ数種類のスポーツ遊具、用具は備えられていることが明らかとなった。2-(3)で考察された通り、母親の運動遊びに対する高い意識の現われがここにも観られた。

(4) 運動遊びに対する行動

被験者に運動遊びをせがまれたりしたら、一緒に行動するかを観た。A群3歳(25.0%)、4歳(14.3%)、5歳(25.0%)、B群3歳(32.1%)、4歳(27.8%)、5歳(37.3%)A、Bを比較するとBの方がわずかではあるが、幼児にせがまれた時は運動遊びをするように努力している傾向はみられる。しかし X^2 検定結果には有意差は認められなかった。

(5) テレビでスポーツ観戦を一緒にすることがあるか。
放映されるプログラムをみると、大半が大人向きのものであり、幼児のスポーツプログラムが少ないため、この質問は母親自身が回答に苦しんだ気配が窺われた。結果は全体からみると数値は低く(20%)台であり、B群5歳児が最も高く29.4%である。この頃の年齢では親と子の興味や関心の違いから、テレビでスポーツを一緒に観戦することは無理があるものと思われる。

(6) 遊びの内容に対する関心

2-(3)の考察の通り、幼児の遊びの内容には高い関心を示している。A群3歳(83.3%)、4歳(85.7%)、5歳(75.0%)とA、B関係なく、どの母親も幼児の運動遊びには関心を持っている傾向は窺われたが、 X^2 検定結果有意差は認められなかった。この項目でも保育者の観察と一致が窺われた。

(7) 室内遊びについて

幼児が室内で遊んでいると気になるか、またその時は外で遊びなさいとうながすか。

(表4) 室内遊びに対する母親の態度

年齢	評価	気にならない		時々		気になる		X^2
		N	%	N	%	N	%	
		3歳	A	13	36.1	14	38.8	
B	14	50.0	9	32.1	5	17.8		
C	0	0	1	17.8	0	0		
4歳	A	12	42.9	8	28.6	8	28.6	2.401
	B	25	34.7	25	34.7	22	30.6	
	C	2	28.6	4	57.1	1	14.3	
5歳	A	9	56.3	4	25.0	3	18.8	6.833
	B	18	35.3	22	43.1	11	21.6	
	C	0	0	3	100	0	0	

(表5) 室内で遊んでいると屋外遊びをすすめる

年齢	評価	屋外遊びを勧める		時々		屋外遊びを勧めない		X^2
		N	%	N	%	N	%	
		3歳	A	14	38.8	16	44.4	
B	16	57.1	7	25.0	5	17.8		
C	0	0	1	17.8	0	0		
4歳	A	15	53.6	11	39.3	2	7.1	5.412
	B	35	48.6	25	34.7	12	16.7	
	C	1	14.3	5	71.4	1	14.3	
5歳	A	11	68.8	4	25.0	1	6.3	4.400
	B	28	54.9	13	25.5	10	19.6	
	C	1	33.3	2	66.6	0	0	

(表4)の通り3、4、5歳と年齢とともに母親は幼児が室内で遊んでいると気になる傾向が窺われた。また、そのような時に外で遊びなさい〔(表5)参照〕と言う母親をA、Bの関係で観るとAの方がやや高い数値が窺われたが X^2 検定の結果有意差は窺われなかった。

これは幼児に対する戸外遊びの奨励もあるが居住環境と関係があるものと思う。

(8) 幼児との対話

(表6) 遊びについて話す(幼児の態度)

年齢	評価	よく話す		時々		話さない		X^2
		N	%	N	%	N	%	
		3歳	A	13	36.1	12	33.3	
B	12	42.8	10	35.7	6	21.4		
C	0	0	0	0	1	100		
4歳	A	20	71.4	6	21.4	2	7.1	8.744
	B	49	68.1	23	31.9	0	0	
	C	3	42.9	4	57.1	0	0	
5歳	A	9	56.3	7	43.8	0	0	12.247*
	B	27	52.9	21	41.2	3	5.9	
	C	1	33.3	2	66.6	0	0	

(※5%)

(表6)の通り3、4、5歳と年齢がすすむにともない、遊びの内容について話す幼児が多くなり、4歳、5歳のA群はB、C群よりも高い数値を示している。しかし5歳児においては5%水準で有意差が認められ、発育発達との関連の強さを示していると思われる。

また、幼児が話をするとき母親はどのような態度をとっているのかを観ると(表7)の通りである。

(表7) 遊びについて話す(母親の態度)

年齢	評価	よく聴く		時々		聴かない		X^2
		N	%	N	%	N	%	
		3歳	A	32	88.8	4	11.1	
B	23	82.1	4	14.2	1	3.5		
C	1	100	0	0	0	0		
4歳	A	26	92.9	1	3.6	1	3.6	16.443***
	B	68	94.4	4	5.6	0	0	
	C	4	57.1	3	42.9	0	0	
5歳	A	15	93.6	1	6.3	0	0	3.099
	B	38	74.5	12	23.5	1	1.9	
	C	2	66.6	1	33.3	0	0	

(***0.1%)

多くの母親は幼児の話をよく聴いているように思われる。しかし数値は低いと話さないと回答した母親がいることは注目される。5歳児の母親で「よく聴こう」という姿勢がA群に高い数値で窺われたが有意差は認められなかつ

た。4歳児には0.1%水準で有意差が認められた。

(9) 遊びの実態

(表8) 幼児の遊戯行動

年齢	評価	よく遊ぶ		時々		遊ばない		X ²
		N	%	N	%	N	%	
3歳	A	25	69.4	8	22.2	3	8.3	7.723
	B	16	57.1	6	21.4	6	21.4	
	C	0	0	0	0	1	100	
4歳	A	20	71.4	5	17.9	3	10.7	3.098
	B	40	55.6	22	30.6	10	13.9	
	C	3	42.9	3	42.9	1	14.3	
5歳	A	14	87.5	2	12.5	0	0	11.502*
	B	29	56.9	18	35.3	4	7.8	
	C	0	0	3	100	0	0	

(* 5%)

降園後、実際に時間的空間を考えた時、遊ぶ時間はあるのだろうか。また子ども達が遊ばなくなったと言われているが、母親は日頃それについてどのように思っているのかを観た。3、4、5歳と加齢とともに遊戯行動が認められ、各年齢ともA群の幼児はよく遊んでいる傾向が観られた。5歳児においては5%水準で有意差が認められた。

(10) 遊びの内容

遊びの内容を観ると、屋外遊びの方がわずかではあるが、遊びの種類も多くあげられた。屋外の遊びを種目別にみると、男子は自転車、泥・砂遊び、器具(固定遊具の略)を好み、続いておもちゃ、水遊び、虫とりなどである。但し水遊び、虫とりなどは3歳児に多く観られる。女子では自転車、固定遊具、おもちゃ、ままごとである。スポーツは種目としてあげてみたが、実際はボール遊びである。その他の種目は、自然の中でのかくれんぼや、鬼ごっこ、草花つみ等を楽しむとなっており、屋外遊びの内容から地域環境の特徴が観られる。

屋内での遊びの内容を観ると、男子はおもちゃ、ファミコン、テレビを観る、女子ではテレビを観るが第1位であり、お絵書き、ままごと、おもちゃで遊ぶ、があげられた。おもちゃの内容はブロック、積木、ミニカー、人形が含まれている。

遊び仲間は兄弟姉妹が第1位で、第2位に近隣の友達があげられ、3歳児では母親、祖父母等である。

遊び場所は(1)家の庭、(2)近隣の公園、(3)友達の家、(4)公園の順である。

降園後のわずかな時間の中で交通事情も悪いことから、遠くまで出かけることもできず、おのずと身近かな者と遊ぶ結果となっているといえよう。

特に3歳児の場合は、保育園での生活で4、5歳児よりも疲労度も大きく、降園後も友達を求めて戸外に出るといことは、発育発達の上から考えても難しいものと思われる。

(表9) 屋外の遊びと屋内遊び

性別	年齢	種目	屋外の遊び								屋内の遊び							備考			
			自転車	泥砂あそび	おもちゃ	虫とり	水遊び	器具	スポーツ	その他	計	屋の内割割合外%	本	絵かき	おもちゃ	T V	ファミコン		その他	計	屋の内割割合外%
男子	3歳	数	43	34	15	10	10	10	0	5	127	50.4	25	15	65	7	0	13	125	49.6	<外>かくれんぼ、散歩 <内>切り紙、カルタ <音>ピアノのおもちゃ、レコード
		%	50.5	40.0	35.2	23.5	23.5	23.5	0	11.8			29.4	17.8	76.5	8.2	0	15.3			
	4歳	数	29	22	14	9	10	20	0	3	107	55.7	12	15	40	10	0	8	65	44.3	<外>かくれんぼ、鬼ごっこ <内>工作、粘土 <音>家族のひく楽器でうたう
		%	27.1	20.6	13.1	8.4	9.3	18.7	0	2.8			11.2	14.0	37.4	9.3	0	7.5			
	5歳	数	18	12	8	1	3	10	1	3	56	57.1	3	2	18	5	10	4	42	42.9	<外>魚とり <内>工作、カルタとり <音>鼻歌をうたう、レコード
		%	25.7	17.1	11.4	1.4	4.2	14.2	1.4	4.2			4.3	2.9	27.5	7.1	14.3	5.7			
女子	3歳	数	19	32	10	16	17	0	3	97	49.5	15	24	29	3	18	10	99	50.5	<外>花つみ、かくれんぼ <内>切り紙 <音>家族がポートサウンドをひく	
		%	22.3	37.6	11.8	18.8	20.0	0	3.5			17.6	28.2	34.1	3.5	21.2	11.8				
	4歳	数	33	43	15	21	58	0	10	180	53.3	11	38	51	4	43	11	158	46.7	<外>アスレチック、かくれんぼ <内>人形、シロアリのファミリー、折紙 <音>おもちゃの楽器	
		%	30.8	40.2	14.0	19.6	54.2	0	9.3			10.3	35.5	47.7	3.7	40.2	10.3				
	5歳	数	21	3	4	7	20	1	5	61	50.0	8	16	14	2	14	7	61	50.0	<外>鬼ごっこ、魚とり、水あそび <内>粘土、折紙 <音>カラオケ	
		%	30.0	4.2	5.7	10	28.6	1.4	7.1			11.4	22.9	20.0	28.6	20.0	10.0				

IV 研究のまとめと課題

被験者の通園しているM保育園は姫路市にあり、園舎の周辺には田圃、畑、小川、広場、児童公園等があり、園でも野菜畑を持っており、季節の野菜を収穫している。また園には、体育館、屋外プール、野外アスレチック、グラウンドと一般に見られる固定遊具はほとんどある。カリキュラムの中にも運動遊びを取り入れた保育をしている。

◇幼児の生活環境

(1) 父親の職業は70%が勤め人で他は自営業（農業、サービス業を含む）が8.6%、自由業が8.6%である。母親の70%は専業主婦であり、専門職を持つ母親は3、4、5歳と年齢がすすむにしたがって少しずつ増加しているがそれでも10%にすぎない。

(2) 祖父母との同居をみると3歳児（57.8%）、4歳、5歳児では30%と低くなり、核家族の現況が窺われた。

(3) 兄弟姉妹については、一人子は全体で26人（9.6%）、そのうち16人は男子である。兄弟姉妹の数は平均2.3人である。

(4) 住宅環境は、住宅地域居住者＝5歳児（89%）、3歳、4歳児（71%）、団地居住者＝5歳（18.3%）、4歳（14%）、工業地域、商業地域の居住者は若干であった。

(5) 庭、家屋の広さをみると、100㎡以上の家に居住している幼児は平均22%、51～99㎡の家が49%、30～50㎡の家が29%である。また庭がある家は65.7%である。住宅事情の厳しさは地方都市でも窺られる。

母親の養育態度から、運動遊びに対しての意識レベルは高いが行動レベルは低いことが認められた。しかし、それらから受ける影響は薄く、被験者は全体に発育良好、活動的、根気強い、理解が早い、明るい性格、屋外での遊びを好むという傾向が窺われた。この背景には、保育園での保育者の日頃の運動遊びに対する保育効果の結果があると思われる。また降園後も比較的戸外で遊んでいるが、これは近隣に残された自然が幼児の心を屋外での遊びへかき立てているのではないかと思われる。

浅田（1987）は「野外での遊びとは自然の中での野生のままの自然を経験することを意味している。子どもが力いっぱい生きようとすれば、その子どもに備わっている生命としての側面も精神としての側面も統一的に発揮されなければならないが、自然の中ではこれらの能力が素晴らしく統合した形で発揮されるので、子どもにとっては、これ以上の遊び場はない」と言っている。

被験者の幼児が遊びと意欲的に係わりを持とうとする背景には、園での運動遊びから培われた諸能力と、幼児を迎え入れてくれる地域社会の自然環境がある。さらに行動レベルでは消極的ではあるが、母親の70%は専業主婦として家庭で子どもを守る姿勢をとっている。そのことが幼児が安心して遊べる背景となっていると思う。

◇反省

幼児の運動遊びを規定する要因を探るために、生活行動を母親の養育態度からの考察をすすめて来たが、断片的な考察に終わり細部にわたっての諸要因については窺うことができなかった。今後は、各項目を横断的な分析を試みることにより社会的背景諸要因との関係を追求したい。

◇参考文献

- 1) 常田奈津子（1981）幼児の遊びの研究（遊びの実態調査）日本女子体育大学紀要 11
- 2) 菱谷信子（1985）子どもの遊びとその親の幼児期の遊びについて 精華女子短期大学 紀要 XIII P45
- 3) 浅田隆夫（1987）序説発達教育学 岩崎学術出版 P114